

〔研究ノート〕

大学在学中のスポーツ活動に関する経験と意識  
- 1970～2014年に国内の大学を卒業した1,800人に対する全国調査より -

小林 勝法

〔Research Notes〕

**Graduates' Experiences of and Consciousness regarding Sport  
Activities on Campus**

**Katsunori KOBAYASHI**

**Abstract**

It is necessary to promote physical activities on campus. The purpose of this study is to clarify university graduates' experiences of and consciousness regarding sport activities on campus, a questionnaire survey was conducted targeting the people who had graduated from a university or junior college from 1970 through 2014, and 900 men and 900 women responded. The survey results are as follows: 1) Among the respondents, 33.4% of men and 22.3% of women used to belong to the athletic clubs or the sporting groups. 2) Further, 10.9% of their alma maters had ski training, 10.7% of them had sport events on campus. 3) 25.7% of men and 14.4% of women had experiences to play sports at the gyms or the playground on campus.

Hence, the study suggests that it is useful for promoting physical activities to have 3 kinds of services like athletic clubs, sport lessons, and allowing to use sport facilities.

**はじめに**

第2期スポーツ基本計画(2017年制定)では、成人のスポーツ実施率の目標値を「週1日以上が65%程度、週3日以上が30%程度」と掲げている<sup>1)</sup>。しかし、スポーツの実施状況等に関する世論調査(2019年11～12月実施、2万人回答)によると、学生(763人)の週1日以上の実施率は60.0%、週3日以上の実施率は28.4%で目標値に達していない<sup>2)</sup>。全回答者(18歳～70歳代)の実施率は、週1日以上が67.2%(男性67.6%、女性66.9%)、週3日以上が33.9%(男性33.5%、女性34.3%)であるので、学生の実施率は全体平均より低い。学生は自由時間が比較的多く、課外活動でスポーツをしたり、学校の運動施設を利用したりできるのにもかかわらず、実施率が低い状況である。

日本私立大学連盟が定期的実施している学生生活実態調査をもとに、大学生のスポーツ活動の参加率を時系列で調べた小林(2020)によると、体育会運動部の参加者は1998年の約12%から2017年には約15%と上昇している一方、スポーツサークルは約12%から約7%に減少している<sup>3)</sup>。活動日数が多い運動部の学生が増加し、活動日数が少ないサークルの学生が減少していることから、週1日以上の実施者が減少していることも推察される。

学生の健康維持と福利厚生のために、スポーツ実施を推奨することは重要である。体育会運動部やスポーツサークルの指導や支援だけでなく、スキー教室やスポーツ大会なども開催してきた大学

も多い。そして、これには長い間、体育教員組織が関わってきた。しかし、近年では体育実技が選択履修となったり、単位数や時間数が減少したりして、体育教員数が減少し、体育教員組織が弱体化したりしている大学も多い。そこで、スポーツ実施を推奨する学生サービスの現状を把握し、あり方について検討する必要があるが出てきている。

## 1. 目的と方法

### 1) 目的

本研究の目的は、大学あるいは短期大学(以下、大学・短大と記す)の卒業生に在学中のスポーツ活動の状況を振り返ってもらい、定量的な分析により、卒業年代や性別などによる特徴を明らかにし、スポーツ実施を推奨する学生サービスのあり方についての示唆を得ることである。

### 2) アンケート調査の概要

調査対象は、大学・短大を1970年から2014年に卒業した人とし、居住地は全国とした。卒業年の5年刻み毎にグループ化し、各群とも男女100人ずつ、合計1,800人から回答を得られるようにした。

調査内容は、個人の属性(年齢や性別、居住地、大学卒業年)のほか、課外スポーツ活動の経験、体育施設の利用などについてであった。

調査は、インターネット調査を専門とする業者に委託し、2018年11月12日から15日の期間に実施した。委託した調査会社は、(一財)日本情報経済社会推進協会よりプライバシーマーク使用を許諾された事業者であり、個人情報の取り扱いは適正に行われていると判断した。また、調査会社から提供を受けたローデータには個人を特定できる情報は含まれていない。なお、筆者が所属する大学においては、重要な個人情報を収集せず、個人の匿名性が確保できるアンケート調査については、研究倫理委員会の審査を受ける必要はないことになっており、それに則って調査を実施した。

### 3) 統計処理および分析方法

以下に示すアンケート項目の回答は性別および卒業年代別に集計し、それぞれの特徴を明らかにするために分散分析(有意水準はいずれも5%)を行った。そして、具体的な状況については自由記述回答を参照した。

#### ①運動部・スポーツサークル参加

運動部・スポーツサークルの参加について、その比率を性別および年代別に算出し、その特徴を明らかにする。

#### ②課外スポーツプログラムの有無

所属大学が提供している課外スポーツプログラムの有無を年代別に算出し、その特徴を明らかにする。

#### ③スポーツ施設利用

所属大学の運動施設を利用した比率を性別および年代別に算出し、その特徴を明らかにする。

## 2. 結果と考察

### 1) 回答者の属性

回答者の属性を表1に示した。卒業した学校種は、男性の97.3%が大学で、短大が2.8%であった。女性は、58.4%が大学で、41.6%が短大であった。卒業年代グループ毎に見ると、1970年卒から1994年卒まではおおよそ短大卒の方が多いが、1995年卒からは逆転し、短大卒が少なくなり、2005年卒以降は12.0%と急減している。短大卒の減少は、1990年代以降に短大の改組が進んだことと符合する。文部科学省「学校基本調査」によると短大数と学生数は、1990年には593校、約45万人であったが、2014年には352校、約13万人となっている<sup>4)</sup>。

回答者の年齢は24歳から76歳、平均は48.8歳であった。卒業年代グループ毎の平均年齢や標準偏差は表1に示す通りである。ほとんどのグループで平均値と中央値がほぼ一致しており、その差の絶対値は男性で0.04～2.45歳、女性で0.08～1.77歳である。標準偏差は、男性で1.87～8.60、女性で1.79～5.22であった。これらの数値が大きいのは、男女ともに2005年卒以降である。その要因は社会人学生が多くなったからで、自由記述回答で確認すると放送大学や通信制大学の卒業生も含まれていた。これらの年代の年齢分布は比較的ゆがみが認められるものの、全体としてはゆがみが少なく、回答者に偏りはないと判断できる。

居住地は全都道府県に広がっていた。人数が多いのは、一都三県が42.9%(男性42.1%、女性43.8%)で、次いで、京都・大阪・兵庫の15.8%(男性15.0%、女性16.6%)であった。

表1. 回答者の属性

	人数	卒業した学校種		年齢(歳)					
		計	短大	大学	平均	標準偏差	最小値	最大値	中央値
男性									
1970～1974年卒	100	1	99	69.0	1.87	64	74	69	
1975～1979年卒	100	1	99	63.8	2.68	59	75	63	
1980～1984年卒	100	2	98	58.8	2.40	54	71	59	
1985～1989年卒	100	6	94	53.9	2.26	49	65	54	
1990～1994年卒	100	3	97	49.5	3.15	44	72	49	
1995～1999年卒	100	6	94	45.8	4.97	40	71	45	
2000～2004年卒	100	1	99	39.9	3.67	35	65	39	
2005～2009年卒	100	1	99	35.5	6.13	29	74	34	
2010～2014年卒	100	3	97	32.0	8.60	25	76	29.5	
全体	900	24	876	49.8	12.82	25	76	50	
女性									
1970～1974年卒	100	60	40	66.9	2.04	64	73	67	
1975～1979年卒	100	51	49	61.8	1.79	59	67	62	
1980～1984年卒	100	62	38	56.9	2.04	54	63	57	
1985～1989年卒	100	48	52	52.8	2.46	49	60	53	
1990～1994年卒	100	51	49	47.3	2.19	44	58	47	
1995～1999年卒	100	43	57	43.5	2.76	39	56	43	
2000～2004年卒	100	35	65	38.2	2.39	34	47	38	
2005～2009年卒	100	12	88	33.9	3.22	29	50	33	
2010～2014年卒	100	12	88	29.8	5.22	24	69	28	
全体	900	374	526	47.9	12.36	24	73	48	

## 2) 運動部・スポーツサークル参加

大学・短大の在学中に参加していた課外活動について、「複数回答あり」で尋ねた結果は、「体育会運動部」と「スポーツサークル」については、それぞれ、男性では14.6%、19.8%、女性では9.1%、13.2%であった。いずれも男性の方が比率が高く、有意差が認められた。卒業年別の結果を図1と図2に示す。参加率が最も高いのは男女ともに「1990～1994年卒」で、男性が42.0%、女性が34.0%であった。バブル景気の末期に学生時代を過ごした世代で、テニスやスキーが盛んな時代であった。そのほかの卒業年代では、時代的な特徴は見られなかった。

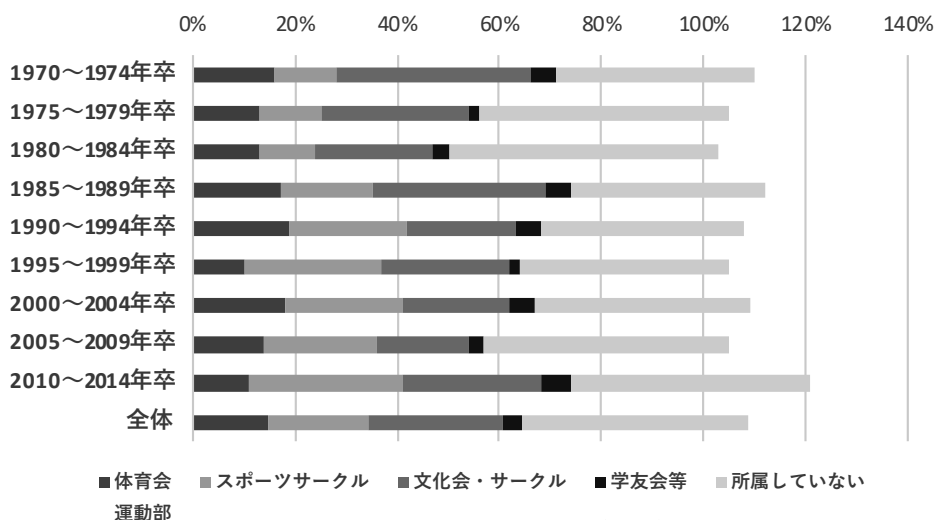


図1 参加していた課外活動(男性)

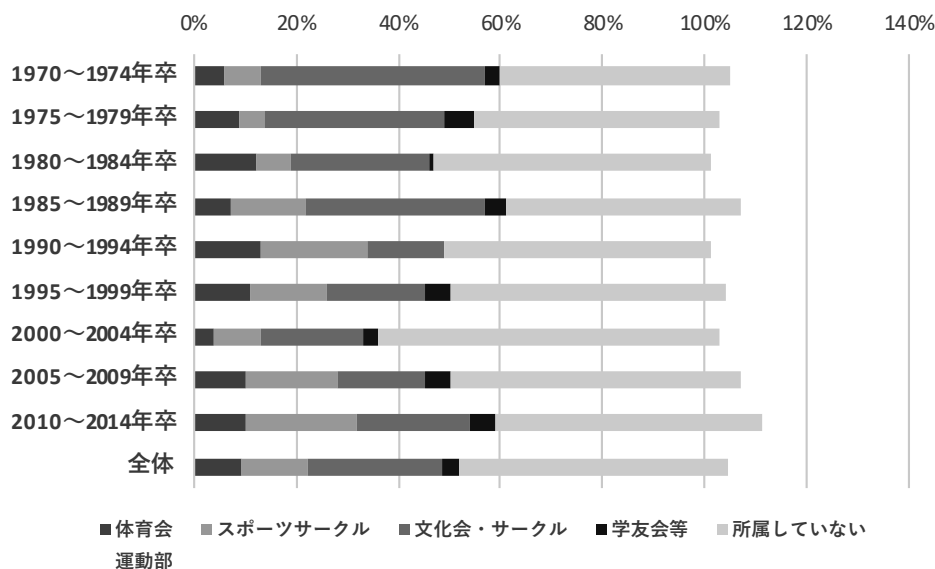


図2 参加していた課外活動(女性)

体育会運動部やスポーツサークルに所属していた経験を述べた自由記述回答は、運動部が29件、スポーツサークルが83件であった。その多くが、健康や体力、人間関係、充実した生活などで良い経験をしたと述べている。典型的な回答は以下の通りである。

- ・就職活動において、大学での**体育会の水泳部**のクラブ活動が大いに有利になったことは、間違いない。現に、我々のクラブの卒業生は、超一流の会社に就職が決まった。(男性、67歳)
- ・**体育会系**のクラブだったため規律は厳しく叩き込まれたので社会人になっていまだき珍しく礼儀正しいと褒められた。年齢問わず話ができる礼儀をわきまえることができた。(女性、44歳)
- ・**体育会**に所属していたが、非常に理不尽なことが多く、そういった意味で社会勉強にはなった。(女性、35歳)
- ・**ワンダーフォーゲル**のサークル活動で、国内の多くの山々を縦走した体験は、一生の宝だと思うし、自分の精神が鍛えられたよい機会であった。(女性、56歳)
- ・**テニスサークル**に所属したことで、人間関係を幅広くすることができました。現在はテニスをすることはありませんが、当時知り合った人と、メールなどで交流があったり、仕事上のビジネスパートナーとしてお付き合いがあります。(男性、36歳)
- ・**テニスサークル**に所属していたため、社会人になった現在でもたまたま気分転換にテニスをしている。卒業後もサークルの友人との繋がりがあり、生涯にわたる交流があると思う。(女性、31歳)

### 3) 課外スポーツプログラムの有無

所属した大学・短大が提供するスポーツの課外プログラム(単位認定なし)について、「有った」とする回答は「スキー教室」が10.9%、「キャンプ実習」が4.8%、「球技大会」が10.7%、「なかった」が78.1%であった。約2割の大学・短大で何らかの課外スポーツプログラムがあったことになる。卒業年別の結果を図3に示す。卒業年代ごとに若干の増減があるがほぼ同程度で、時代的な特徴は見られなかった。

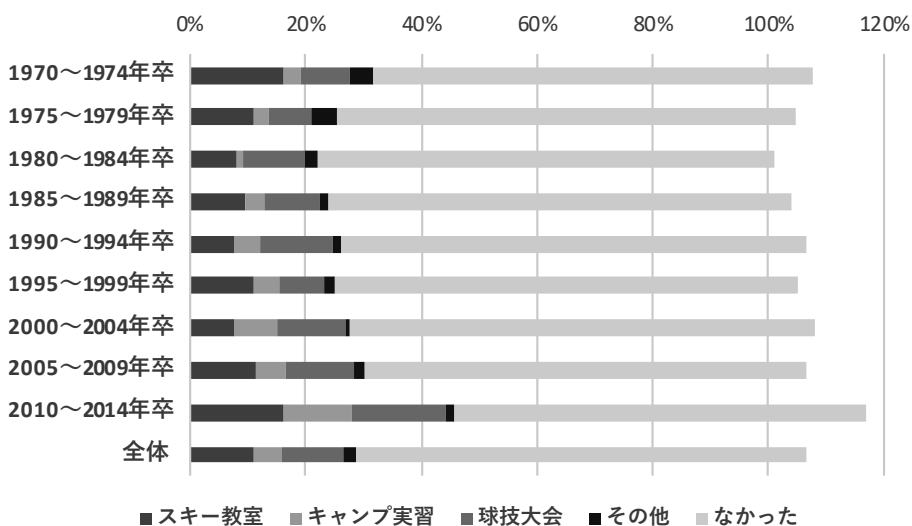


図3 課外スポーツプログラムの有無

課外スポーツプログラムについて述べた自由記述回答は11件であった。その多くが、楽しかった経験を述べている。そして、スキー教室が卒業後のスキー実施に影響を及ぼしたとする記述が4件あった。典型的な回答は以下の通りである。

- ・ **スキー教室**があり、そこでスキーの基礎を教わって少し滑る事ができるようになり、就職した先で友人達にスキーを誘われて行く事が出来たのが良かったです。(女性、66歳)
- ・ 北海道の**スキー教室**に4年の春休みに参加して、初めてスキーに触れた。社会人になって、本格的にスキーに取り組むようになった。(女性、56歳)
- ・ 学部や学科対抗の**球技大会**がよく行われていたので、野球や卓球など得意な種目については積極的に参加して楽しんでた。(男性、59歳)
- ・ クラス対抗の**球技大会**でバドミントンをして優勝した。とても楽しかった思い出です。今からでも、機会があったらしてみたいと思います。(女性、56歳)

#### 4) スポーツ施設利用の可否と利用経験

授業や部活動以外に大学・短大のスポーツ施設を利用できたか、また、利用したかどうかについての回答は、「利用できたので、利用した」が男性25.7%、女性14.4%、「利用できたが、利用しなかった」が男性24.1%、女性21.7%、「利用できなかった」が男性20.1%、女性21.8%、「わからない・おぼえていない」が男性30.1%、女性42.1%であった。卒業年別の結果を図4と図5に示す。卒業年代ごとに若干の増減があるがほぼ同程度で、時代的な特徴は見られなかった。「利用した」との回答は男性の方が多く、有意差が認められた。「わからない・おぼえていない」との回答は女性の方が多いが、これはスポーツへの関心が男性よりも低いからであると推察できる。

スポーツ施設利用について述べた自由記述回答は16件であった。その多くが利用した経験を具体的に述べている。正課体育の授業がきっかけとなり、授業の空き時間に施設を利用してスポーツを友人と楽しんだという記述もあった。総じて、スポーツ施設の開放により、学生のスポーツ活動を推進し、健康増進やコミュニティ形成に役立っていることが伺えた。しかし、中には体育館の存在の記憶がないという記述も2件あった。典型的な回答は以下の通りである。

- ・ **体育館やグラウンド**などでサッカーやバレーボールを楽しみました。多くの友人ができて、大変充実した時間を過ごすことができました。(男性、63歳)
- ・ 田舎の小さな短大であり、**施設などもなかったため**、一番いい時に個人的な行動でのスポーツ経験ができなかったのが残念です。(女性、63歳)
- ・ サークルは文科系だったし、学校自体も文科系なのでスポーツは全くしなかった。**体育館があったかどうか**も覚えていない。(女性、48歳)
- ・ **体育館やボール等の備品**を自由に使えたので、講義が無い空いた時間に友達とテニスやバレー等を楽しむことが出来たので良い思い出になっている。(女性、36歳)
- ・ 大学時代はほとんどスポーツ経験がない。大学では**ジム施設**が格安で利用できる環境にあったので、今思えば使っていればよかったと後悔している。(女性、32歳)
- ・ 卒業した大学は、都内の大規模な大学であったため各種施設が充実し、学生に対して**スポーツ施設の開放**にも積極的であった。そのため、スポーツができ、体力作りにとっても役立ちました。(男性、31歳)
- ・ 授業でバドミントン、テニスを教わり、その面白さから授業以外でも趣味として**スポーツ施設**を利用してテニス等を楽しんだ。(男性、26歳)

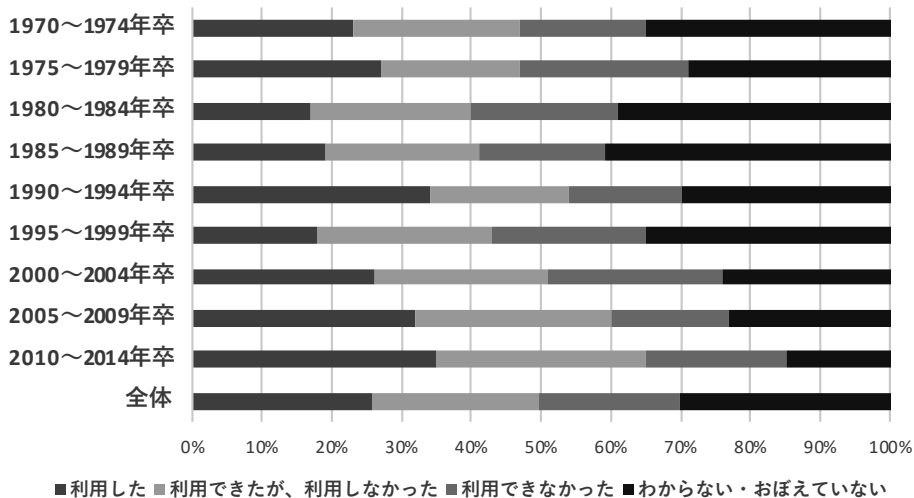


図4 スポーツ施設利用の可否と利用経験(男性)

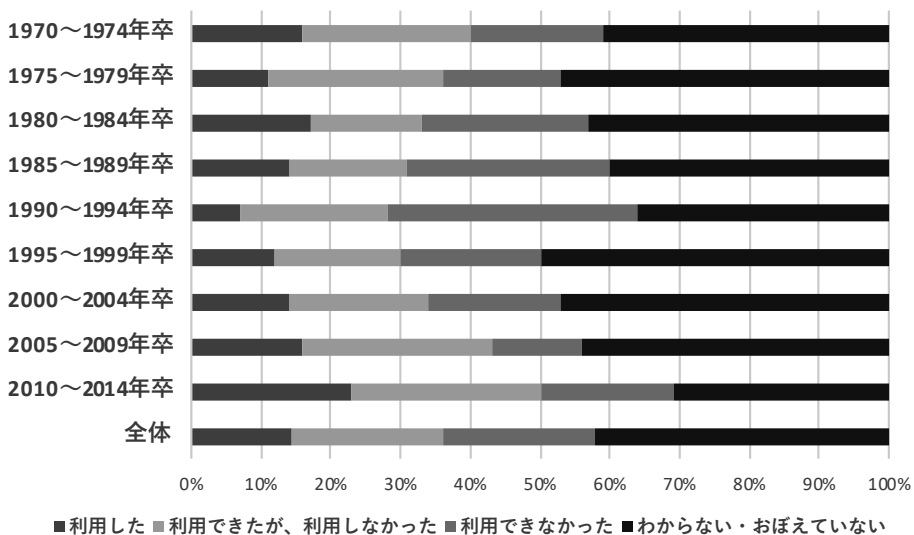


図5 スポーツ施設利用の可否と利用経験(女性)

### 考察

本研究では、大学・短大を1970年から2014年に卒業した人を対象としてアンケート調査を行い、男女900人ずつ、合計1,800人から回答を得た。回答結果をもとに、スポーツ実施を推奨する学生サービスのあり方について検討する。

### 1. 課外スポーツ活動の支援

在学中に参加していた課外活動については、体育会運動部が男性14.6%、女性9.1%で、スポーツサークルは男性19.8%、女性13.2%であった。卒業年代ごとの参加率では、「はじめに」で引用した日本私立大学連盟の調査のような低下傾向は確認できなかった。体育会運動部やスポーツサークルに所属していた経験については、健康や体力、人間関係、充実した生活などで良い経験をしたと述べる自由記述回答が多いことから、課外スポーツ活動の支援は重要であると言える。

### 2. スポーツの課外プログラムの提供

所属した大学・短大が提供するスポーツの課外プログラム(単位認定なし)について、「有った」とする回答は「スキー教室」が10.9%、「球技大会」が10.7%、「キャンプ実習」が4.8%、「なかった」が78.1%であった。自由記述回答では、「スキー教室参加が卒業後のスキー実施に影響を及ぼした」や「球技大会で友人とスポーツを楽しんだ」などの回答が複数あった。これらのプログラムは、多様なスポーツ経験を提供する機会となっており、在学中および卒業後において、豊かなスポーツライフを形成する上で重要であると言える。

### 3. スポーツ施設開放

授業や部活動以外で大学・短大のスポーツ施設を利用した卒業生は、男性が25.7%、女性が14.4%であった。自由記述回答からは、スポーツ施設の開放により、学生のスポーツ活動を推進し、健康増進やコミュニティ形成に役立っていることが伺えた。このことから大学の施設開放が重要であると言える。

なお、本研究では調査対象を特定の大学・短大に定めなかったため、回答者の出身大学・短大の状況がさまざまであった。そのため、アンケート調査の設問が個別大学の状況にどれだけ即していたかが疑われる。また、回答者の記憶が薄れていると判断できる回答も散見した。これらの問題を解決するためには、大学・短大を特定し、回答者を卒業時か卒業後年数の浅い卒業生に絞った調査や事例研究、実証実験的研究をおこなうのが適切であると考えられる。

## 謝辞

本研究は、2018年度文教大学学長調整金の助成を受けて行った。

## 【文献】

### 1) 文部科学省(2017)スポーツ基本計画

[https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/sports/mcatetop01/list/detail/1383656.htm](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/detail/1383656.htm)

### 2) スポーツ庁(2020)令和元年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」

[https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/toukei/chousa04/sports/1415963\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/sports/1415963_00001.htm)

### 3) 小林勝法(2020)学生スポーツの現状と大学の課題、IDE現代の高等教育、第620号、16-19

### 4) 文部科学省(各年度)学校基本調査

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm)